
バレンタインデー kiss

抹茶小豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインデー k i s s

【Nコード】

N6007Q

【作者名】

抹茶小豆

【あらすじ】

容姿端麗、明朗闊達で腕も立つ、一見無敵に見える東郷君には弱点があった。

それは女性恐怖症。

人より体毛がちよっぴり濃いせいで前カノにこっぴどく振られてしまったから異性が怖くてしかたがない。

東郷は部活の後輩で学校一の美少女霧島から告白されてしまうのだ
が…？

男コンプレックス

東郷忠臣は、ため息を吐いた。

風呂上がり、生まれたままの姿を鏡の前にさらしてみる。

「俺、マジ体毛やばい。剃るのもアレだし、いつそのこと脱毛しちまうか」

間もなく高校生活、最後のバレンタインデーを迎えようとしている。東郷にとって、いや世の男性の諸君にとって、それはむしろ受験よりも大切な行事であった。

もっとも頭のいい東郷はすでに滑り止めの大学にも合格していたし、受験だからと特にプレッシャーを感じることはなかった。

目下の悩みは異性関係。

そう、現在東郷には彼女がない。

高一のとき、通学電車で告白されて一度付き合ったことがあったが、他人より体毛が濃いせいでこっぴどく振られてしまったというトラウマがある。

悲しい過去を思い出し、東郷は少し涙ぐんだ。

人間とは皆、なにかしらのコンプレックスを抱えている。

特に自分に自信が持てないときほど、他人から見れば取るに足りることないでぐちぐちと悩む。

やがて時が立てば、それを笑い飛ばす度量もできるのだが、そのときは気がつかない。

ひたすらに自分の殻に閉じこもり、その傷を舐めることで精いっぱいになっているもんだ。



昼休みの食堂は、戦場だ。

腹を空かせた育ちざかりが、ざっと1000人ほどつめかける。五台ある食券機の前にはすでに長蛇の列ができており、生徒たちは苛々と自分の番を待っている。

毎日食券機の前に並ぶのが嫌で、東郷のポケットには密かに数種類のメニューを表示した食券が忍ばせてあった。

「なんにすんの？ 如月」

隣で如月は壁に貼り付けられてある、少し黄色く変色した手書きのメニュー表をまじまじと見つめている。

「ほんじゃあ、俺今日ラーメンにするわ」

東郷は制服のポケットを探り、ラーメンの食券を如月に手渡した。

「ほれ」

「あらあ、毎度のことながら気が利くのね、東郷君は。まるで世話焼き女房みたい」

茶化したようにそういった如月を東郷は横目で軽く睨んだ。

「うるせーよ、どうせ俺は外見強面で、体毛濃いくせに、中身は女々しいやつだよ。」

「モテねえよ。つうか、てめえ金払え、320円だ」

そういって、東郷が如月の前に手のひらを差しだすと、如月はぺろりと舌を出した。

「東郷君のいけずう」

そういって、口をとがらせる。

「俺は男には奢らんと決めている」

そういうと如月はしぶしぶ財布から320円を取りだし、東郷に支払った。

「なあに？ 東郷君まだあの失恋をひきずっているわけ？」

少しにやけた顔で如月が東郷の顔を覗きこんだ。

如月がラーメンをすすするその横で、東郷がとりめし丼をかきこんでいる。

如月はイケメンだ。

少し色素の薄い髪は、脱色したわけではなく自前である。

母方の祖父がスエーデンの人で、クォーター。

そういうわけで如月は目鼻立ちの整った、どこか日本人離れた容貌をしている。

（腹立つくらいイケメンだね、君は確かに）

東郷はまじまじと如月を見つめた。

「いいよね、君は。女なんて掃いて捨てるほどいるもんねえ。どうせ俺はモテないよ。だってケツ毛ボーボーだもん」

かという東郷も強面ではあるが、決して不器量なわけではない。

男らしい野性味と凛々しさから、戦国バサラに登場する片倉小十郎を彷彿とさせる。

いわば寡黙なワイルド系美男子といったところか。

「アレだよ？ モテるモテないって、体毛はむしろ濃い方が男も女もモテるんだよ。そもそも体毛っていうのは自分のフェロモンをできただけ遠くに飛ばすためにあるもんだしよ。だから東郷君は自分がモテないことを体毛のせいにしちゃあ、いけねえ」

（はーん、いい男にはわからねえよ、このナイーブな男心なんて）

東郷は鼻を思い切り擽めて見せた。

如月はそんな東郷をを気にもかけず、ひとりで話を進めている。

そんな二人を遠巻きに女子たちが眺めていた。

（キヤー、ラッキー。如月先輩と、東郷先輩だわ。何を話しているのかしら）

（どんな話題でも、あの二人なら絵になるわ）

絵になるか？ っていうか、体毛について、だぞ？

夢見がちな年頃なのであろう。

乙女たちは憧れと羨望の混ざった、複雑な視線を二人に送り続けた。

「あつ、だからさあ、男と女ってのはもつとスピリチュアルな何かなんだよ。俺の姉貴が超当たって言ってた占い師がいるんだけど、放課後行ってみねえか？」

そういって、如月が身を乗り出した。

（占い、ねえ……）

東郷はあまり気乗りしなかったが、せっかく如月が勧めてくれたこともあるし、放課後にその占い師を尋ねることにした。

如月によればその占い師は、よく学校の裏手にいるらしい。

校門を出て、コンクリートの塀を一巡りしてみるが、その姿を見つめることはできなかった。

冬の日暮れは早い。

グラウンドを朱に染め、沈みゆく太陽がわけもなく泣きたいほどに胸を締め付ける。

遠くに野球部の掛け声を聞きながら、東郷は間もなく迎える高校生活の終焉を思う。

青春が終わる。

そんな気がした。

何かに焦り、だけど何に焦っているのかはわからない。

とりあえず、ムラムラします。

「あー、彼女欲しい！！！」

沈みゆく太陽に向かって、東郷は叫んだ。

「ひっひっひ……それが青春ってもんだよ。若いねえ」

逆光に小柄な猿のようなシルエットが浮かび上がる。

少しぎょっとして東郷は目を凝らした。

老婆が道端に御座を敷き、小さな台の上に腰かけている。

老婆はひどく痩せており、腰も醜く曲がっていた。

黒っぽい着物を着て、黄味がかった白髪を背に流れるままにしている様はどこか見る者に対し、畏怖の念を抱かせる神々しさすら兼ね備えていた。

「あたしは占い師だ。この辺では良く当たると有名なんだよ。ひひひ……なんならお兄さんも見てあげようか？」

東郷はぐくりと生唾を飲み込んだ。

未来を知りたいと思う好奇心と、畏怖の念が交差する。

すべてを見透かしているような老婆の視線から、不意に逃れたい衝動に駆られる。

がそれとは裏腹に足が動かない。

老婆の白く濁った瞳から、視線をそらすことすらできない。

「恐がることはないよ。さあ、こっちにおいで」

老婆の骨ばった手が東郷を手招きすると、操られるように東郷は老婆の前に座った。

「あんたは、魂が性別を間違えているね。あんたは本来女になるはずだったんだ。なのに男の身体に入ってしまったもんだから、ちっともモテやしない。それが原因だ。あんたが愛するパートナーを作りたいのなら、あんたと同じように性別を間違えてしまったパートナーを選びな。そうすればきっと上手く行く」

（なんだかよくわからない理屈だ。

要するに俺は身体は男だけれど、魂が女で、その俺と付き合うパートナーは魂が男でないとうまくいかないと……）

東郷は苦虫を噛みつぶしたような、渋い顔をした。

「じゃあ、男っぽい女を選べばいいのか？」

そう問うと、老婆は顔をくしゃくしゃにした。

「どうした婆さん？」

「いや、入れ歯がはずれたもんでな。そうさのう、まあだいたいそういうことさな」

老婆は入れ歯がうまくはまらないのか、まだもぐもぐとやっている。

いつの間にか夕日はもうすっかり沈んでしまい、辺りはうすいコバルトに色を変えている。

きんと冷えた空気に一番星が映えた。

思わず吐き出した吐息が白い。

「男ばい女……か」

果たして本当に出会えるのかな、

そんな漠然とした不安が東郷の胸に満ちる。

問題児

少しくたびれた制服も、しつくりと自分に馴染んだいつもの風景も、毎日当たり前のように顔を合わせていたクラスメイトとも、もうじきに別れの時を迎える。

既に進学先を決めたもの、就職をする奴、その分岐点に立てばそれぞれが別々の人生というものを歩み出す。
なんだかそれが現実のこととして受け入れがたい。

東郷は廊下を歩きながら、不意に心に満ちる切なさに耐えた。

教室の少し埃っぽい匂いとか、机に彫った落書きとか……。卒業という名の感傷が背中を押して、少し自分たちを大人にしている。

だけどそんな心の変化がどこかそばゆくって、同時に些細な抵抗を試みたりもする。

極寒の二月に校庭で風船に水を入れて投げ合ったり、廊下を意味もなく全力でダッシュする奴もいる。

そんな風景に東郷は思わず微笑を誘われた。

「おーおー、若いねえ……」

そう呟きながら東郷もまた、この学校の思い出の場所へと足を運ぶ。

非常階段の少し錆びた手すりをじっと見つめ、なんだか不意に懐かしさが込み上げた。

（そういえば悪友どもと、その下でよく女子のパンツ覗こうとしてたっけな）

東郷は不毛な回想にぼりぼりと頬を掻いた。

そういう何でもない日々を、後に人は青春と呼ぶのかもしれない。

非常階段を上り、渡り廊下を進むと第二体育館が見えてくる。
さらに階段を下りてその地下に剣道部の道場があった。

少し薄暗い廊下をぬけると、威勢のいい掛け声が聞こえてきた。

「おー、やっとる、やっとる」

なにかしら、胸に酸っぱいような、それでいて暖かいものが東郷の心に満ちた。

「面！」

足音とともに、声が飛ぶ。

汗と熱気に満たされたその場所。

白けた天井のライトや木の匂い。

この場所は変わらないのに、なぜだか胸にぼっかりと穴が空いたような寂しさを東郷は感じていた。

（この場所に、俺も居たんだ。ていうか、俺たちの場所だった。昨年の夏までは。

春が来れば、俺の知らない誰かが入部し、俺の知ってるこの場所で、俺の知らない時間が流れていく。

そこにあいつは、いるのかな。誰かと笑い合って、ちゃんと元気でやっていくのかな）

それを馬鹿げた感傷だと気付き、東郷は自嘲した。

「あー、東郷先輩！」

そう言って派手に抱きついたのは、二年生の信濃だった。

「うわっちょ…ちょ…」

東郷は予期せぬ後輩の抱擁に、バランスを崩してその場に尻もちをついた。

「あのね、東郷先輩。俺ね、俺、この間の個人戦で初めて勝った…んだ」

信濃はそういうと、瞳いっぱい涙を溜めこんだ。

信濃は小柄で、しかし人一倍の頑張り屋だった。

いつも皆が練習を終えてからずっと自主練を続けていた様子が、東郷の記憶に蘇る。

「そっか、がんばったな。信濃君」

そうやって東郷は信濃の頭を撫でた。

「あっ、ちよっとずるい、信濃どきなさいよ！ 東郷先輩は皆に会いに来たのよ」

そういつて口を尖らせるのは、同じく二年生の笹原だ。

笹原は気は強いが、面倒見がよくていつもみんなのフォローにまわっている。

この学校の剣道部は男と女に分かれておらず、みんながひとつの剣道部員だ。

この部活で過した三年間の思い出は、東郷にとってどれもかけがえのない大切な思い出となっていた。

そして東郷は周囲を見回す。

「東郷先輩、こんにちは」

そう言うてにつこりと微笑んだのは、現在の剣道部主将を務める仙台だった。

長身に薄く筋肉の張り付いた理想的なボディーと、歪み知らずのサラサラとした黒髪が、少しシャープな印象を与えるととても端正な顔立ちだ。

仙台の剣道の腕前は、おそらく現剣道部では某一名を覗いては一番といていいだろう。

さらに東郷が仙台を好ましく思っている理由は、仙台はものすごく女子にモテるのに、奢ったところがまったくいいほどないということだ。

いつも礼儀正しくて誰に対しても親切であり、東郷は後輩でありながらこの仙台に尊敬の念すら抱いている。

「東郷先輩、アイツなら、いないですよ」

そういつて仙台は意味ありげな視線を東郷に向けた。

仙台は意地悪だ、と東郷は思った。

「ああ、アイツね……」

そう振られると、東郷もその話題に触れざるおえない。

「霧島さんは東郷先輩いが引退した夏から、全然剣道部に顔を出していませんよ。まだ退部届は出ていませんが、誰が何度誘ってもここに姿を現すことはありませんでした」

（まあ、そうだろうな）

なんとなくそう思っていた東郷は、ぼつの悪い声色で

「そう……」

とだけ応えた。



「ああ、くっそ補習授業かったりいな」

そう呟いて、少女は屋上に大の字で寝そべった。

極寒の二月に粉雪が舞う。

コンクリートの冷たさに身体の芯まで、凍てついてしまいそうだったが、少女は動こうとしない。

（動いたら、負けだ）

少女は自らそう律し、梃子でもここで籠城を決め込むつもりだった。この学校は私学のエリート校だけあって、試験で芳しくない成績をおさめると速攻で教師とのマンツーマンの補習授業が行われる。再テストで合格点をとるまでは、何度でも追試をうけさせられるシステムなのである。

「ああ、嫌。本当嫌。補習うけるくらいなら、いつそこで命尽きたほうがマシ」

少女は、そこいらへんのアイドルなんか目じゃないほどの、いわゆる美少女であるにのだが、その瞳にはまるで生気がない。最近では息を吸うことすら面倒だと思う始末だった。死んだ魚のごとき眼差しをただ、鉛色の空に向けている。

少女は不意に微笑み、瞼を閉じた。

指先の感覚もだんだんと麻痺してゆく。

なんか、久しぶりに眠れそう。

そう思ったときだった。

鉄製の扉が開き、来訪者が現れた。

「うっわ、やっぱりここに居たよ」

東郷は掌で顔を覆った。

「霧島、お前には防衛本能といものがないのか？ 雪降ってるこのクソ寒い日に屋上で昼寝する奴があるか！ 凍死すんぞ」

そんな東郷の言葉に少女はのろのろと身体をお越し、定まらない視線を東郷に向けた。

視界に東郷の姿を認めると、少女の顔にみると生気が満ちた。

「あっ、東郷センパイだ。すいませんが一発やらしてください」

少女の嬉々とした声色に、東郷はがっくりと肩を落とした。

男と女の真剣勝負

「霧島、馬鹿かお前は。それは女の子のいう台詞じゃねえだろ。つていうか、とりあえずまずこれを着ろ」

そういつて東郷は自分が着ていたコートを脱いで霧島にかけてやると、だぼだぼのコートを羽織り、霧島は不思議そうな顔をして東郷を見つめた。

「来い！」

そういつて東郷は霧島の手を引っ張った。

「あっ」

霧島はつんのめりそうになって声を上げた。

東郷と霧島では、足のコンパスが違う。

霧島は東郷に引っ張られるようにして歩いた。

「お前、氷みたいに冷たくなっちまってるじゃねえか、本当に死ぬぞ、馬鹿！！！」

東郷は霧島を自販機の前に連れて行き、小銭を入れた。

「何飲むんだ？」

そう問うと、霧島は上目使いに東郷を見上げた。

「奢ってくれるの？　じゃあ、コーヒーがいい。ブラックで」

霧島は抑揚のない声で応えた。

「却下、お前ブラックコーヒー飲むとき顔顰めるから、これな」

東郷は苛立たし気に、紅茶花伝のロイヤルミルクティーのボタンを押した。

「じゃあ、聞くなよ」

霧島はぼつりと呟いた。

「ほれ、それでも飲みやがれ」

そういつて手渡すと、霧島は東郷のコートの上からそれを持った。コートが大きくて手が出ないのだ。

「ごめん、仙台君。準備室借りるね」

東郷は焦ったように部長の仙台に声をかけ、霧島を準備室まで引っ張ってきた。

準備室には部員の色々な私物が持ち込まれ、散乱している。

主に雑誌やマンガ、DVDなのだが、部のペットとして、なぜだか金魚まで飼われている始末。

ちなみに藻の発生した水槽で飼われている金魚の名は、ぎよぴちゃんだ。

部屋を埋め尽くしているのは大概がガラクタなのだけれど、その中にストーブもあった。

ありがたい事に何代か前の先輩が寄贈してくれたものだ。

東郷はとりあえず、霧島の身体を温めたかった。

ストーブの電源を入れると、ゆっくりと赤い火が灯った。

霧島はストーブに手をかざし、ぽつりと呟いた。

「暖かい……」

「そりゃ、そうだろ。ストーブだからな」

軽く頭痛を堪え、東郷がいった。

「いえ、東郷センパイが……」

そう言って霧島は、東郷を上目づかいにちらりと見やった。

（そういうことを真顔でいわれると、ものすごく恥ずかしいんだよ。ポケっ）

東郷は耳まで真っ赤になった。

「そ…そんなことはどうでもいいんだよっ！ お前このクソ寒いときに一体あの場所でないやってたんだ」

「ああ、空見てました」

霧島は気だるげに応えた。

「空なんかどこでも見れるだろ。なんにもあんなに寒い場所でなくたって……」

「センパイと一緒に見た場所で、見たかったんです」

東郷は言葉に詰まり、視線を泳がせた。

嫌な雰囲気だ。

こいつの目が怖い。

東郷はごくりと生唾を飲み込んだ。

「な……なんで、剣道部の練習に参加しない？」

なんとなく緊張して声が上ずる。

「あー……あたしはもともと東郷センパイ狙いだったんで、先輩が引退したら、興味ないです」

「ちょっと待て、っていうかお前、あれだけ才能あるのに辞めちゃうなんて、絶対もったいないって」

思わず少し語気を荒げてしまった東郷を見て、霧島は少し悲しそうな顔をした。

「だったら……センパイがあたしに引導を渡してください」

霧島は床に転がっていた竹刀を東郷に放って寄越した。

「センパイ、あたしと勝負してくれませんか？先輩が勝ったら、いうこと聞いて真面目に剣道やります。でももし自分が勝ったら、センパイ……あたしの彼女になってください」

東郷は霧島の申し出に、盛大な溜息を吐いた。

「彼女ってなんだよ。俺男だし。つか剣道は誰かにやらされてやるもんじゃない」

そう言って東郷が腕を組むと、霧島は愁傷気に下を向いた。

「あたしはこんな奴だけど、でも好きな人のいうことは素直にきけます。センパイ、もうすぐ卒業しちゃうじゃないですか。最後の思い出とsoしてきっかけをください」

（きっかけ……ねえ。まあ、確かにこいつも俺にフラれて意地張ってたんだろうなあ。そういうことなら、いい機会かも）

「わかった。ついてこい」



「え？ ちょっと霧島さんじゃない」

「なんで？」

防具を身に付けた東郷と霧島の登場に、道場はどよめいた。

「悪いが仙台君。ちょっとだけ道場貸してくれないかな」

「それは構いませんけど、一体何をするのですか？」

仙台は啞然とした表情で東郷たちを見つめている。

「霧島と賭けをするんだ。剣道であいつが俺に負けたら部に戻って真面目に剣道をやるんだって、そいであいつが俺に勝ったら、俺があいつの彼女になるんだと」

「彼女…ですか」

はあ、そうですか。

と仙台は頷いた。

もはやツツコミどころがわからないといった風情だ。

（竹刀を握るのはお互い夏以来……か）

東郷は手にあるその感触を確かめた。

防具の中で、霧島がニタリと笑った気がして、東郷の背筋に悪寒が走った。

「約束は守ってくださいね。センパイ」

試合開始の合図と同時に、激しく繰り出される霧島の竹刀を交わしながら東郷は間合いをとるが、じりじりと追いつめられ、次第に逃げ場を失ってゆく。

「うおー！　好きだ好きだ好きだ好きだ　東郷センパイ！
！！」

霧島の攻めには、容赦がない。

（ぐっ、相変わらず重っ！！！！　ほいでもって早いっ！）

防ぐだけでは負けてしまう。

そんな東郷の焦りに一瞬の隙ができた。

「一発、やらせてくださーい！！！！」

霧島のふざけた絶叫と共に、竹刀が空を切る。

「めーん！！！！」

東郷の頭に衝撃が走り、目の前が白んだのだった。

東郷の想い

少し霞んだ東郷の視界の先で、霧島が笑っていた。

（あつ、ちよつとなんか腹立つくらいに可愛い顔）

東郷は馬鹿みたいに霧島の顔をただじっと見つめていた。

「ポカリ飲みます？ センパイ」

そう言つて霧島が心配そうに東郷を覗きこんだ。

顔が近い。

（つていうか、俺一体どこで寝てるんだ？ 頭に感じるこのやわら

かい感触は？ ……つて霧島の膝じゃん！！）

「のわっ！ ててて…てめえ！！！」

驚いて飛び起きようとした東郷を、霧島がやんわりと押さえる。

「おもいつきりやつちやつたんで、もうちよつと寝ててください。

心配です」

（あーもう、俺超かつこ悪いじゃん）

そう思つて東郷は不貞腐れた。

霧島の手が、何度も何度も東郷の頭を撫でた。

不思議とそれは東郷にとって心地悪いものではなくて、なぜだか安心した。

（怪我のせいかなんなのか、多分さつき喰らった面のせいで俺、馬鹿になつてる）

道場の隅っこで、霧島は東郷の頭を膝に乗せて、至極幸せそうな表情をしていた。

（ああ、お前でも、そんな表情できるんだな）

東郷はそんなつぶやきを飲み込んだ。

それは新鮮な驚きだった。

そういうわけで、東郷は少しだけ寝た振りを決め込む。
(全部怪我のせい。そういうことにしておこう)



「そういうわけですから、センパイ、約束守ってくださいね」
金色に染まる校庭を歩きながら、霧島は凶悪に可愛い顔でそう言った。

(コイツは顔だけ見ていたら、本当に天使なんだけどなあ)
東郷は小さく溜息をついた。

「わかったよ、で俺が彼女なんて一体なにやったらいいんだ？」

(ふざけているよな、相変わらずコイツは)
東郷は腕を組んで霧島を見据えた。

「一発やらしてください。センパイ」

冗談なのか本気なのか、霧島はその辺の見分けがときどきつかない。
東郷は少し不機嫌になった。

(淫乱なんだろうか、それともひょっとして欲求不満なんだろうか？)

そんな問いが東郷の頭に浮かんだが、小さく咳払いをし、否定する。

「却下、俺は結婚するまでやらないって固く決心してるから。どうしてもやるっていうなら他の奴にしろ」

「じゃあ、いいです。あたしは、センパイ以外は全く興味ないんで。それじゃあ手作りのお弁当をあたしのために作ってください。あと

バレンタインデーには、センパイの手作りチョコが欲しいです」

「そんなんで、いいのか？ お前」

「とりあえず、です。一緒に映画見たり、遊園地行ったりもしたいし、いろいろ……です」

なんだか拍子ぬけた。

それじゃあ、単なる普通のカップルじゃん。

「なんだよ、もっと無理難題ふっかけられるかって思って、内心びくびくしてたんだぜ。女装しろとか言われたりとか……さあ。まあ今は受験があるから遊べねえけど、受験終わったらいいよ」

「センパイ、携帯番号とメルアドって変えてませんよね」

「ああ、そのままだ」

東郷はそのまま口を噤んだ。

実際に携帯をかえようと思ったことは、何度もある。

霧島の番号を消そうと試みたことも。

だができなかった。

「メール、送ります。センパイは受験生だから、電話は我慢します。でも……死ぬほど声が聞きたくなったら、電話しちゃうかもしれないせん」

霧島は少し唇を噛みしめ、射抜くような真剣な眼差しを東郷に向けた。

その視線に、なぜだか東郷はどぎまぎしてしまう。

（あのときには受け止められなかったコイツの気持ちを、少し大人になった今なら……受け止められるのだろうか）
東郷の中にふとそんな想いが過り、頭を振った。

（正直自信はない。今でもこいつが怖くてしかたがないのだから）

「返信、できないかもよ」

東郷がそう応えると霧島の顔が、一瞬泣きそうに歪んだ。

（悪い、とは思うのだ。お前にそんな顔はさせたくない。させたく

ないのに。なぜだかいつも傷つけてしまう。
ただひとついえることは、距離が必要だということ。そうでなければ、俺は自分を保てない)

「あつ、でも約束だから弁当は作ってやるよ。明日下駄箱の前で待っている」

東郷はぶつきら棒にそういうのが精いっぱいだった。

「あつ、はい」

そう言って微笑んだ霧島は、東郷が知っているそれよりも少し大人びた感じがして、きりきりと東郷の胸を締め付けた。



翌朝学校では如月がしたり顔で、俺を待ちうけていた。
東郷はむくれて、ロッカーで靴を上履きに履き替えた。

「どうしたの、東郷君」

「って、お前……その顔はすでに事の成り行きを知ってて言ってるだろう」

少し剣呑な表情で東郷が如月を見やる。

「よもや剣道でお前が霧島に負けるとはよ」

如月はそんな東郷に少し肩をすくめてみせた。

「うるせいやい」

東郷は思いつきり鼻を擽めた。

霧島は強い。

だが東郷とて、霧島に負けるつもりは毛頭なかった。

「青島流道場の名取で、既に師範を取得しているお前が、なんで負

けたか、わかる？」

鞆を背にひっかけて、如月が東郷に問う。

「俺より霧島が強かったからだろ？」

東郷が不貞腐れてそう応えようと、如月は小さく溜息をついた。

「いんや違うね。技量だとか、そういうこと以前に相手が霧島だったからお前は負けたんだよ」

「どういう意味だよ」

「お前ってさあ、気付いていないかもしれないけど、霧島のことずっと前から好きなんだよ」

しらっとした調子でそういった如月のその言葉に、東郷は思考回路がショートした。

「は…はあ？　なに言ってるの？　俺はアレルギー出るくらい霧島のことは……」

「だったらなんでこの期に及んで、霧島のこと目にかけるわけ？」

嫌いなら寝た子を起こすようなことしないでいいじゃない。もうすぐ卒業なわけだし。本当は霧島のこと心配で心配で仕方ないんですよ？」

そう問われて、東郷の全身がかつと火照った。

「それはっ、ただ単に同じ部活のセンパイとしてだなあ」

心配じゃないといえば、嘘になる。

夏の引退試合の後、最後に彼女に会った日からずっと胸にしこりができているみたいに、それは重くて、苦しかった。

「お前は霧島が好きなんだよ」

如月の言葉はまるで東郷に死刑を宣言するかのような、残酷な響きを孕んでいた。

センパイのお弁当

（俺が……霧島のことを好き、だと？）

東郷の中に爆弾を投下し、如月は背を向けひらひらと手を振った。

「おい、ちよっと待て如月」

如月を追いかけて階段までいくと、階段のそばにある柱に身体をもたせかけ、うつむき加減の霧島がいた。

「のわっ……」

霧島の姿を見つけ、東郷はおもわず階段を踏み外し、見事にすっ転んだ。

「痛ててて」

通り過ぎていく下級生たちが東郷を見てくすくすと笑っている。

「大丈夫、ですか？ センパイ」

霧島が東郷の前で立ち止まり、小首を傾げた。

「これ！」

そうやって東郷は霧島のために作ってきた弁当をつき出した。

「あのっ、一緒に食べたいんですけど」

「却下、悪い。昼はいつも如月と食べてるから」

そう言って東郷は霧島から逃げる様に階段を駆け上がった。

心臓がばくばくいっている。

（あの馬鹿がいらぬことを言うから、余計に意識してしまうではないか。）

東郷はなんだか如月を呪いたい気持ちにすらなってきた。

階段の踊り場で、一部始終を見ていた如月が口を開いた。

「あーあ、お前ってば本当に馬鹿！ 昼飯くらい一緒に食ってやったらいいじゃねえか。あんなこと言うから見ろ、彼女また泣きそうな顔してただろ」

可哀そうにと如月が腕を組んで考えこむ。

「うるせー、このバカ！ 如月のバカバカバカ……」

「って、俺に八つ当たりしてんじゃねーよ。馬鹿はお前だし」

（わかってるよ！ それぐらいわかってるんだ。如月よ。本当に馬鹿なのは俺だ）

東郷はいい返せないで唇を噛んで、如月に包みを突きだした。

「ほれ！」

如月がきよとした顔をする。

「なによ、これ」

「なにして弁当だよ、お前の分も作ってやったから、三人で食おう」

「はっ？ 何言ってるの、この人。アレだよ？ 人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られちゃうんだよ？」

東郷は逃がすまいと、しっかりと如月の襟首を掴んだ。

「ちよっ、東郷君瞳孔開いてるし……しかも目血走ってるし……」

「なーに気にすんな、恋路じゃなくて後輩指導だつってるだろうが」

刹那、如月の表情からいつもの軽薄さが消えた。

「じゃあさ、俺が霧島を好きになっても、お前は平気なんだな」

如月の言葉に東郷は心臓をきゅっと鷲掴みにされたような息苦しさを感じた。

「お、お前いきなり何いって……」

「いきなりじゃねえよ、霧島って可愛いじゃん。本当は入学当初から目をつけてたんだよね。でもお前がそうやって煮え切らない態度で彼女のことを傷つけてばかりいるのなら……」

東郷の表情をちらりと伺い、如月は意地の悪い笑みを浮かべた。

「ほーら、困るでしょう？ 俺でなくたって霧島は可愛いんだから放っておくと、ろくなことないって」

「いや……ですけど、すいませんが一緒に行ってください。お願いします」

東郷はもう如月に頭をさげるしかなかった。

「もう、早く治しなよ。女性恐怖症」

呆れたような如月の口調に東郷はなんだかイラッとする。

（治せるもんなら、とっとと治すわ！ このボケ！

こんなややこしい状況でなかったら、俺だって……。

あいつにあんな悲しい顔なんて絶対にさせないものを）

そう考えてなんだか、東郷は泣きそうになった。



「いただきます」

昼休み、霧島はひとり屋上で、東郷が自分に作ってくれたお弁当を開いた。

弁当箱というにはいささか大きく、いうならばそれは少し小さめの重箱だった。

黒い漆塗りに金粉で模様が施された一目で高価だとわかる重箱に、まるで料亭で出されるような料理の数々が美しく並びつけられている。

前に霧島が大好きだといった卵焼きは、やっぱり霧島の好みにほのかに甘い味付けが施してあった。

「罪滅ぼしっスか？ センパイ……」

そこにこめられた切ないほどの東郷から自分に向けられた愛情を思い、霧島の頬に涙が伝った。

東郷への想いが一方通行でないことはわかっている。

東郷もまた自分のことを深く想ってくれている。

それは多分自惚れではなく、真実だ。
と霧島は思う。

しかし東郷は、そんな自分自身の想いにさえ蓋をして、霧島の気持ち拒絶するのだ。

それは進むことも、戻ることもできないで、ただその場に立ち尽くすしかない苦しい恋だった。

それでも、夏までは耐えられた。

部活という接点があって、剣道という絆では繋がっていられたから。東郷の引退試合の後で、屋上で思いを告げたが、断られた。

それ以来、会うことすらもできなくて、切なくて死にそうになってしまっている自分がいた。

「あー……バカ切ないんですけど……ああ、もう……」
とりあえず自分の片思いに、思う存分酔ってみようと思う霧島だった。

屋上の切り取ったような空。

今日は晴天だ。

真冬日の中にふっとまじる小春日和。

霧島はひとり、東郷の愛情弁当を食べて感涙している。

「あー…あたし……ばかみたい」
そう呟いたときだ。

屋上の鉄の扉が開き、東郷がひょっこりと顔を出した。

「どうした、お前、泣いてんのか？」

「あーあ、東郷君が意地悪するから」

その後ろから如月も顔をだした。

「な…ななな、泣いてなんかいませんよ。あはは、嫌だなあ。目に

ゴミが入っただけです」

途端に死にたいほど恥ずかしくなる霧島だった。

「見せてみる、とってやる」

そういった東郷の心配気な顔が近づいてくる。

霧島の顔が赤くなる。

「だ……大丈夫……です。もう取れたみたい」

そういつてなんとか霧島は笑顔を取り繕ってみせる。

（あー、もう、なんだってこの人の周りは空気が薄いんだ）

まだバクバクという心臓をなんとか諫めて、霧島が口を開いた。

「それより、センパイ、来てくれたんですね。嬉しいです」

「い……いや、あのお茶と、味噌汁をだなあ……渡しそびれたから」

そういつて東郷はバツの悪そうな顔をした。

「味噌汁って、お前どんだけ気合い入れて弁当作ってんだよ」

そういつて如月も弁当の包みを開けた。

「なんじゃこれ、スッゲー豪華じゃねえか」

そういつて如月がぽかんと口を開けている。

「おう、そうだぞ。俺が五時起きで作った特製弁当なんだからちゃんと心して食えよ」

えへんと、東郷は威張った真似をしてみせた。

「あの、センパイ。朝の五時って……」

（受験生なのになんだか心配になってきた）

心配げな霧島の表情に気がつき、あわてて東郷が取り繕う。

「いっとくけど、俺もともと早起きだからっ、料理は普通に好きだし、ついでだし、だから別に……別に……」

「その割には、あたしの好きなものばかり入ってます。このお弁当」

そういつて霧島が微笑むと、東郷は耳まで真っ赤になった。

「ありがとうございます。とても美味しかったです」

霧島がそう御礼をいうと、東郷は明後日の方向を向いて

「お……おう。また明日も作ってやらあ」

と応えた。

それは、不慮の事故でした。

二人の雰囲気を微妙に感じ取り、如月はそうそうにその場を退散した。

しかしいざ屋上に二人きりになってしまうと、妙にどぎまぎしてしまふ。

「ねえ、センパイ。あたしのこと嫌いですか？」
少し陰った表情で霧島が東郷に問う。

「いや、嫌いじゃねえんだよ。これが」
自分でも驚くほど素直にそう言えた。それが今の東郷の本音だったからだ。

先ほどの如月の言葉に、確かに東郷は取り乱したのだ。
霧島のことを失いたくはないと切に思った。

そんな自分に気がついてしまったのだから、もう後戻りはできない。
「じゃあ、あたしのこと好きですか？」

霧島がそう問うと、東郷は真っ赤になって下を向いた。
「……おう」

蚊の鳴くように、そう呟いた東郷の言葉に霧島が目を見開いた。
「あ……あのっ」

「いや、ごめん。多分もっと前から俺はお前に惚れていたんだと思う。でもただ、俺女性恐怖症なん……」
全部言えなかった。

霧島に押し倒されたからだ。
「嬉しい」

そう呟いた霧島のか細い声を聞いたのが最後だった。
背に押し付けられた柵が、不吉に動いた。

（え？　ちよっと、ここ屋上なんですけど）
足元に感じる浮遊感。

これは死んだなと東郷が覚悟を決めた。

◇ ◇ ◇

「いつてえ、っていうかここどこだ？」

見慣れぬ光景に東郷は目を瞬かせた。
すでに辺りには薄闇が帳を下ろしている。
結構な時間気を失っていたらしい。

（どうやら俺は三階の雨避けに落っこちちゃったらしいな）

直落下は避けられたものの、それでも屋上から裕に二メートルはあ
る。

そして気付く。

「霧島は？」

落下の直後、確かに反射的に霧島を守ろうと抱きしめたはず。
しかし確信は持てなかった。

最悪の事態が脳裏を過り、気が狂いそうになる。

そして次の瞬間その視界に信じられないものが映った。

「俺がいる」

（俺の下に、なぜ俺がいる？）

それは、毎朝毎晩生まれてこのかた18年間鏡で見続けてきた自分
の顔に相異なかった。

「う……うん。痛ったあ」

そう言って東郷の下に居る東郷が、目を覚ました。

「え？なんであたしがあたしの目の前にいるの？」

東郷が女言葉で、なんだかтонちんかな事をいつている。

そして…その可能性に想いをはせ、東郷はそつと胸に触れてみた。

『ある』

そこには確かに男にはないはずの、柔らかな膨らみがあった。

つまり、あれか……。

俺がアイツであいつが俺でって、そういうことなのか???

◇ ◇ ◇

信じがたい事実をひとまず横に置き、お互いの怪我の状況を確認し、とりあえず保健室へと向かった。

あの場所から落下して、お互いに軽いかすり傷で澄んだのは奇跡に近い。

保険医が留守であつたため、手当は自分たちですることになった。

「ほら、お前大丈夫か？」

そう言って東郷は、もともとは自分のものであつた身体の額に絆創膏を貼りつけた。

この非常事態に東郷は取り乱すしかなかったが、なぜだか東郷の身体に入った霧島は至極嬉しそうだった。

「なーんで、嬉しそうなの？ お前」

東郷が不機嫌に呟く。

「えー、なんかいいじゃないですか。愛する人の身体って」

艶めかしい意味合いを含んだ霧島の言葉に、東郷は絶句する。

（その、アレだ……。身体が入れ替わっちゃうってことは俺の身体をコイツに見られると？）

その可能性に思いを馳せ、東郷の思考回路がストップした。

「やめろ、ばか。そんなの耐えられない。俺の身体なんてみたら絶対お前俺の事嫌いになる」

迸る感情とともに熱い涙が東郷の頬を伝った。

「え？ なに……。ちよつとセンパイ？」

激情のままに叫んで咽び泣く東郷に、霧島が戸惑う。

それでも躊躇いがちにふわりと霧島の腕が東郷を包んだ。

「泣かないで。そんなことでアタシ絶対に東郷センパイのこと嫌いになりません」

東郷の低音ボイスで『あたし』と言われた日にゃあ、ちよつとぞつとしないでもないが、霧島は真剣だった。

「俺……。前の彼女にそのせいでこっぴどく振られたんだ。それ以来……。女が怖くなった。異性に対して心を開くことができなくなったんだ。俺の身体は醜い。だからきつとお前は俺の身体を見て俺の事をきらいになる」

そう言ってひどく泣きじゃくる東郷の涙を、霧島が唇で拭う。

東郷はその柔らかさにひどく戸惑って顔を上げた。

「愛してます。東郷先輩。前の彼女さんについては、いずれ報復するとして……」

（報復すんのかよ！ 涼しい顔して恐ろしいこというな）

東郷は背中中に薄ら寒いものを感じた。

「その彼女さんは本気でセンパイのことを好きじゃなかっただけです。本当に好きならそんなことで嫌いになったりしません。信じてもらえませんか？」

そう言って霧島は優しく微笑んだ。

東郷は泣きじゃくりながら、コクリ頷いた。

すると霧島はとんでもないことを提案してきた。

「センパイ、いきなりなんですけどホテル行きませんか？」

「は？ お前一体何言ってるの？」

東郷はぱくぱくと酸欠の金魚のように口を動かした。

「やだなあ……、いくら今あたしがセンパイの身体を乗っ取っているからといっても、いきなり変なことはしませんよ。それよりも一度二人一緒のときお互いの身体を確認しといたほうがいいんじゃないかなって思うんです」

東郷は霧島の言葉に小さく頷いた。

ラブホテルにて

駅前の路地を一本入ったあたりには、ネオンのきらついた如何わしい店が立ち並ぶ。

「ねー、入っていいようよ」

「やだ、恥ずかしい」

その入り口で付き合って間もないと推測される、大学生風の男女が初々しくも乳繰り合っている。

（うわっ、あいつら今からやっちゃうんだ）

そう思うとなんだか奇妙な羞恥と興奮が、東郷の心を支配した。

なんとなく気不味くて、東郷は隣に佇む霧島をちらりと見やった。やっぱり自分の顔にしか見えない。

自分の顔が無表情にただ突っ立っている。

（ああ、霧島の奴が何考えているのか、さっぱりわからねえよ）

極度の緊張のあまり、東郷はパニックを起こしそうだった。

「ねえ、やっぱりやめにしない？ 制服だし、絶対やばいよ」

東郷が気弱に呟く。

「ここまで来て一体何言ってるんですか！ お互いの身体が入れ替わっちゃった以上、それを見ずに過ごすことなんて不可能でしょう？ とにかく少しくらいお互いに身体のこと、予備知識として知っておかなくちゃ」

確かにそれは正論だと東郷も思う。

だがまだ心の準備ができていない。

東郷は半泣きになりながら、抵抗を試みた。

そんな東郷のことなど気にもせず、霧島はすたすたと東郷を引っ張って奥へと進んでいく。

「いーやーだー 霧島ー」

そう言って駄々をこねる東郷に、霧島は溜息を吐いた。
次の瞬間、霧島は軽々と東郷を抱きかかえてしまう。

「今は身体が入れ替わってるんですから、あたしの方に分があります。ちよっと黙ってて」

「うう」

ぴしゃりと言われて、東郷はむくれた。

鍵を受け取り、部屋に入ると霧島はしげしげと部屋の内装に見入った。

「へえ、なんだ。ふつうのホテルとあんまり変わらないんだ」

白を基調とした清潔そうな内装や、やわらかな照明は決して心地悪いものではなく、あえてびっくりしたといえ、浴室がガラス張り、で部屋から中の様子が丸見えだってことくらいだった。

霧島は丁寧な東郷をベッドの上に置いた。

「今から服を脱ぎますから」

霧島がそういうと、ベッドの上で東郷が慌てふためいた。

「ま……待て、霧島」

霧島はコートを脱ぎ、そして制服を脱ぎ捨てた。

「ちよ……ちよ……ちよっと待て！ 霧島ったら！！！」

そういって、東郷は霧島に縋りついた。

十八年間見続けた自分の身体がそこにある。

しかしそれは元カノに嫌われて以来、拒否し続けた自分の身体だった。

「やだっ……見ないで」

熱い涙が東郷の頬を伝う。

「俺、お前に……嫌われたく……ない」

嗚咽混じりの東郷の言葉に、霧島が少し戸惑った顔をし、やがてプルプルと小刻みに震え出した。

「あ……ああもう！ 死ぬほど愛しいです。センパイ」

小刻みに震えた霧島が、ぎゅっと東郷を抱きしめた。

「嫌いになんてなりません。信じてください。だからセンパイも裸になって」

「な…なな何言ってるの？ お前」

東郷は耳まで真っ赤になった。

「お前は恥ずかしくないのかよ。お前の裸を俺が見ちまうんだぞ？」

「恥ずかしくなんてありません。死ぬほど好きな人ですから」

「さりげに…お前っ…」

東郷は言葉を紡げず、ただ赤面して下を向いた。

「脱がして差し上げましょうか？」

そう言って霧島が、制服のブラウスに手をかけた。

赤いタイが少し衣擦れの音をたててベッドの上に放りだされ、ブラウスのボタンが器用に外されていく。

その様子がベッドの前に据えられた大きな鏡に写し出されている。

（ああ、俺が霧島の衣服を脱がしている）

東郷は霧島にされるがままになりながら、そう思った。

少し骨ばった大きな手がブラジャーのホックをはずすと、乳房が露わになった。

透き通るような白く柔らかなふくらみの先端に、淡い桜色の突起が首を擡げている。

ホックを外されたスカートが、その場にずり落ち、下着も脱がされていく。

鏡に写るのは一糸纏わぬ、霧島の裸体。

綺麗だと、東郷は思った。

それは霧島に拒まれることが恐くて、自ら封印した願望だった。

霧島への想いを断とうとすればするほど、それは自身を焼いてゆく。密かに夢に現れ、苛みもした。

鏡に写る真逆の願望。

それはひどく滑稽なことだと東郷は思った。

いつの間にかその隣に、衣服を脱ぎ捨てた霧島が佇んでいた。
鏡の中の霧島を直視できずに、東郷の瞳に涙が溢れた。

「どうして泣くの？」

霧島の声が耳に優しく落ちる。

「だって……俺の身体なんて」

そう言っただけで東郷が再び嗚咽をあげると

「何万回でも言いますよ。愛しています」

霧島の腕が東郷の素肌を絡め取った。

東郷はしばらくの間、その温もりを確かめる様に身を沈めた。

全身が脈打つ音を、霧島の胸の中で聞いていた。

その温もりの中で、枷が溶けていくのを感じる。

拒絶の悲しみも、痛みも、もうそこにはなかった。

心を偽り続けた苦しみも、受け入れられたという安堵感に変わって
いく。

「落ちつきました？」

穏やかな微笑を称え、霧島が問う。

「ああ……ありがと……な」

東郷の泣き顔が笑顔に変わった。

そんな東郷の顔を霧島が嬉しそうに覗きこんだ。

「まあ、そういうわけで目出度く、センパイの女性恐怖症は克服さ
れたというわけなんですけど……」

霧島は言葉を濁し、なんだかもしもじとしている

「うん？ どうした？ 霧島」

そんな霧島を不審に思っただけで、東郷が不思議そうな顔をする。

「あの……あたし、トイレに行きたいな、なんて」

そんな霧島の言葉に、東郷はまたも絶句するのだった。

確認事項

「と……ととと……トイレって、ちょっ、ちょっ、ちょーーー！
」

酸欠の金魚のごとく東郷が、口をぱくぱくさせた。

「っていうか、自然現象ですし、こればかりは仕方ないかと」
別段焦った様子もなく霧島が淡々と言った。

「いや、だから、あの……」

（排泄を霧島に見られてしまう……と？）

東郷はその場で凍りついた。

「ちなみに、男の人ってそういう時、どうするんですか？」

霧島は下半身を見つめ、小首を傾げた。

（は……恥ずかしい事じゃねえ。自然現象だもんよ）

東郷はなんとかそう自分に言い聞かせるが、恥ずかしくないわけはない。

しかしそれはどうしようもないことで、東郷は覚悟を決めた。

とりあえず服を着て、東郷はポーズをとってやる。

「だからな、まず便座を上げてだな。ここをこう持って便器に向かって発射させるわけだ」

東郷にとっては死ぬほど恥ずかしい内容を話しているのに、霧島はてんで気にしていない様子だ。

「ふーん、そうするんだ」

そういつて、霧島はトイレに入って行った。

「あの……センパイのアレって、なんか曲がってますよ？ 可愛い
の」

戸板一枚隔てて霧島の声が聞こえてくる。

霧島のなんだかちよっぴり嬉しそうな声色に、東郷は内心絶叫した

い衝動に駆られた。

（ばかやろう！ そのカーブこそが男のロマンなんだっ！ 右曲がりのダンディーなんだよー！ー！！！） そここそ、男のプライドが集約しているといっても過言ではない代物に『可愛い』なんて断じて言っちゃいかーん！！！！）

「センパイ、座ってしちゃダメなんですか？　なんか飛び散っちゃいそうで」

（霧島、お前は神をも冒瀆するつもりなのか？　古来より立って用を足すという行為は神が男に与えたもうた、唯一の特権なんだぞ！！！！）

「あれ、センパイ。紙で拭いたらちよつと形が変わっちゃいましたよ？」

（オーマイガット！　お前なんちゆうことしてくれてんだよ。形を変えるな、俺はその部分については気に入るってんだから）

東郷は頭に血が上り過ぎて、すでに軽い酸欠を起こしかけていた。

「ふー、すっきりした。でも男の人の身体っていうものも、なんだか大変なんですネ。早く慣れなくっちゃ」

そういつて霧島がハンカチで手を拭きながら、トイレから出てきた。

「っていうか、お前元に戻る方法を考えないか？」

「そりゃあ、元に戻る方法があるのなら、戻りたいですけど……センパイはなにか思いついたんですか？」

そう問われて東郷は小さく首を横に振った。

「いや。全くどうしていいのかわからないんだ」

「そうですよね。あたしも同じです。でもね、こうなったのもあたしとセンパイの薄からぬ縁だと思うんですよ。不謹慎かもしれませんが、ちよつとくらいこの状況を楽しもうかなって、そんな気持ちすらあるんです」

東郷はそんな霧島の言葉に、カチンときた。

「いいよな、お前は。能天気で。でも俺はこれでも受験生なんだぜ？　いくら滑り止めが受かっているからといって、この状況では第一志望を受験することもままならない」

少し苛々とした口調でいってしまったことを東郷は悔いた。

霧島の顔が、悲し気に曇ったからだった。

「あの、あたしは成績は確かにメリ込んでますけど、集中力はあるほうなんです。センパイ、受験日まであたしに勉強を教えてくださいませんか？」

「ばかいうな、今からやって間に合うわけねえだろ。あと10日だぜ？」

「やってみなくっちゃわからないじゃないですか！　駄目もとてもあたし頑張ってみます」

霧島の真剣な眼差しに、東郷はたじろいだ。

実際受験などそんなに大ごとには考えていなかったし、滑り止めは今通っている高校と同じ系列で、敷地内に位置する。

身体が入れ替わってしまった以上、霧島のことのが心配なわけで、むしろこの状況で第一志望など受からないほうがよいのだが。

「それと、あのっ、センパイにあたしの身体のこと話しておきますね」

そう言うのと霧島は鞆の中から小さなポーチを取り出した。

「女の子には……ですね、その……月に一回、生理というものがあ

りまして……、その……多分もうすぐ、今日か明日くらいにはやってくると思うのですが……」

言いにくそうに霧島は東郷の顔を見つめた。

「せ……生理？ この俺が??？」

妙なリアル感をもった羞恥が東郷を満たす。

「あ……あの、生理っていうと、アレか。中学の保健体育の授業とかでやった、あの……」

知識としてはもう当然その頃には知っているのだけれど、授業中に真顔で教師が語るとなんだかものすごく恥ずかしい気持ちなんってしまう、アレだ。

「そうです、アレです。あたしの場合は周期によって波があるんですけど、痛む時は本当に痛むので、そのときはここに鎮痛剤入りますから。それとこれがナプキンです」

そう言って、霧島は小さな四角いピンクの包みを掌に置いた。

「女の子の身体っていうのは、デリケートなんであくまで清潔に、丁寧に扱ってくださいね」

霧島はそう言って東郷をじっと見つめた。

「そっか、わかった。お前の身体を大切にすると約束する」

東郷は厳かな気持ちでそれを受け取った。

霧島綾香

「センパイ、じゃあとりあえずあたしの家に案内します」

そういつて連れてこられたのは、駅前の一等地にある超高級マンションのエントランスの前だった。

「へえ、霧島ここに住んでいたんだ」

東郷は珍しそうにきよろきよろと辺りを見回した。

オーク材を基調としたシックで落ちついた内装に、絞った間接照明が映え、磨き抜かれた大理石の床には、体裁よく観葉植物なんかが配されていた。

オートロックを解除し、エレベーターに乗り込む。

（霧島の家族って一体どんな人たちなんだろう）

そう思うと東郷は、何だか緊張してきた。

そんな東郷の様子を伺い、霧島は少し困ったような顔をする。

「センパイ、あのあたしって一人暮らしなんですよ」

七階でエレベータを降りたあたりで、霧島が告げた。

「へ？ そうなの」

高校生で一人暮らしっていうのは、なんだか珍しい。

実家がよっぽど田舎にあるのかもしれない。

少し歩いて表札のない部屋の前までくると、霧島は俺の持つ鞆から鍵を取り出した。

「だったらホテルなんて行かなくても、ここで良かったんじゃない？」

東郷がふと思ったことが、なんとなく口をついてでてきた。

「まあ、そうなんですけど、あたしあんまりこの場所好きじゃないから」

そう答えた霧島は、なんだか寂しそうだった。

だだっ広いリビングの隅っこの方に、小さなソファとテレビが置

いてある。

内装も家具もどれも高級そうなものばかりなのに、ひどく殺風景な部屋だ。

とても高校生の女の子の暮らす部屋には見えない。

きよろきよろとあたりを見回し東郷は考え込む。

「うーん、一人暮らしでファミリータイプの3LDKでは、ちょっと広すぎるのかも」

そう言った東郷の前に霧島はスリッパを差しだした。

「もう慣れましたけどね」

そう言って微笑む霧島は、やはりどこか寂し気だった。

そんな霧島を東郷が背後から抱きしめる。

如何せん身長差があるから、抱きついているようにしか見えないのだが。

「ホームシックってやつ？」

「それが……恋しいと思える家が、もともとなかったもので」

やはり霧島は寂しげな表情で困ったように笑っている。

リビングに置かれた硝子製のショーケースの上に、写真が飾られていた。

写真の中で霧島を、そのまま30代にしたような美人が笑っている。

「母親です。あたしが中三の時に他界しました。あたしもとと妾の子だったんです。だからそのときまで認知もされずに、ずっと父親の存在も知らずに育ったんですよ」

霧島はそれをなんでもないことのように淡々と話した。

「母親の死後、父と一切合わない事を条件に一応認知はしてもらったんですけど、全部弁護士を通じてだったので、父とは実際に会ったことがないんです」

結構ヘビーな内容だったと思うのだが、霧島はただ淡々としている。

「父親が何をしている人なのか、どんな人なのか詳しくはわからないのですが、ただ金回りはいいいみたくで、不自由はしてません」

「霧島、お前なあ……」

東郷は小さく溜息をついて、そう言っ腕を広げてみた。

「くるか？ こいこい」

「うっ……」

そう言っ声をつまらせながらも、霧島は不器用に東郷の胸に顔を埋めた。

「泣くか？ 泣くのか？ 泣いてもいいぞ？ 霧島」

「意地でも泣きません……」

東郷の胸の中で霧島のくぐもった声が聞こえる。

東郷はただ霧島を抱きしめ、小さい子をあやすように何度も背中を撫でた。

「あの、お前アレだ。心の栄養失調なんだよ。やっとわかったわ」

「まあ……そうなんだと思います」

霧島は否定しなかった。

なんか初めて会ったときから、どこか霧島に感じていた違和感。

虚ろで、不安定で、でもなぜか放っておけなかった。

死んだ魚のような目をしたこいつを、心から笑わせたいと願った。

初めて会った日から、その印象は強烈で。

ひよっとするときから既に……こいつから目が離せなかったのかな。

なーんてことを思いつつ、東郷は密かに赤面した。

「いいよ。俺がお前を育てるよ」

そういうと霧島がきょとした顔をする。

「俺さあ、多分初めてお前と会ったときからずっと……お前に笑って欲しかったんだよ」

「なんですか？ センパイあたしのこと口説くいてんですか？」

そう言っ霧島は意味ありげな視線を東郷に向ける。

「うーん、そうとってくれても構わないが、なんつうか、もっとう……惚れたはれたよりも深い次元でお前のこと愛したいっと思う」

のよ」

「なんですか、それ」

「一口に愛つったって、色んな愛があるんだよ？ アレだ。キリストさんが言うところの見返りを求めずに与える愛をアガペー。友を愛する心をフィレオ、親が子を愛するときに使われるのはストルケ、そして性愛のエロスだ。恋愛なんてのはミスターチルドレンも歌っているように『いわばエゴとエゴのシーソゲーム』なわけでき、でも本当に大切な人って言うのは、一体どの愛で愛せばいいのかわなくて、俺時々思うんだ」

そんな話をまるで拒絶するかのように、霧島は俺の膝を枕にして、その場に寝転がった。

「あたしは、エロスの愛しかわからないや」

少し不貞腐れたような霧島の背中が、悲しいと叫んでいた。

東郷家にて

「お前ん家の事情は、だいたいわかった。そういうわけで今度は俺の家、東郷家について一応説明するわ」

東郷は胡坐をかいて、カーペットの上にどっかりと座った。

「センパイ。パンツ見えてますよ」

霧島の指摘に東郷は赤面し、股を閉じて座り直す。

「っていうか、百聞は一見に如かずなんで、とりあえずセンパイの家に行きませんか？ あたし勉強しないと」

霧島は立ちあがり、それにつられて東郷もおずおずと立ちあがった。日はもうとつぷりと暮れ、人々がそれぞれにせわしなく家路に向かう時間帯である。

足早に歩きながら、何かを考え込んでいた霧島が、ようやく東郷の方に視線をくれた。

「センパイの家のこと話していただけませんか？」

「お？ おお。俺の家は、そんな大したもんじゃねえんだけど、一応剣道の道場をやっていて、祖父がその師範なんだ」

東郷がそういうと、霧島はようやく腑に落ちたという表情をした。

「ああ、それでセンパイ青島流なんですネ」

「まあ流派なんてどうでもいいんだけどな。なんつうか家風がちよっと変わってるつうか……でもまあ、お前なら多分大丈夫だとは思うんだけど……」

東郷の歯切れの悪い物言いに、霧島は柳眉をわずかに顰めた。

「どういうことです？」

「どう説明したらいいんだろ。修行の一環つうか……一般家庭に比べるとちよつとだけスリリングだったりするわけよ」

「へえ、スリリング……ねえ」

霧島は曖昧な笑みを浮かべた。

「ほれ、あれだ。見えてきた」

駅前の一等地に延々と塀が続く、純日本風の建物が見えた。

「え……これって老舗料亭とかじゃなかったんですね」

霧島が目をぱちくりとさせた。

歴史を感じさせる木造りの巨大な門には内側から強靱な鍵がかけられ、よつぽどの行事があるときでなければ開門されることはない。普段家の者が出入りするのとは、その横に設けられた、小さな勝手口からだった。

東郷は勝手口の取っ手をいじってみるが、開く気配はない。

「あー畜生、鍵かけやがったな。じじい」

東郷は舌打ちしながら、正門から西に走っていく。

「どうしたんですか？ センパイ」

霧島も東郷についていくが、少し不安気な顔になる。

「いくぞ、霧島ここから入る」

正門から西に位置するこの場所は、他の場所に比べると少し塀が低く感じられた。

東郷は鞆を塀から中に投げ入れて、身軽に跳躍した。

「いいんスカ？ まあそういうことなら」

と霧島も東郷に続く。

「曲者！」

刹那、皺枯れた声とともに竹刀が空を切る音が耳についた。

「危ねえ、霧島！」

反射的に東郷が霧島を庇い、その頭上にまともに竹刀を喰らったのだった。

意識を失い倒れた東郷を霧島が抱き起こす。

「センパイ、ちょっと大丈夫ですか？」

「忠臣、女人に庇われるなど言語道断。武士道の風上にもおけぬ不届き者が！」

小柄な老人が、霧島にめがけて勢いよく竹刀をふるうが、空中で竹刀を霧島に片手で受け止められてしまう。

「なんですか？ コノヤロウ。不意打ち野郎に武士道のなんたるか

など、とやかく言われたくねえんだよ。足腰立たんようにしてやるか。コラ」

メキメキという不吉な音を立てて、竹刀が真っ二つに折れた。霧島のその眼は、すでに瞳孔が開いている。

「あわわわわ……たっくんがSだよ」

迫力負けをした老人がその場で、腰を抜かしやがてしくしくと泣き始めた。

「あいたた。もういいよ霧島。その辺でおじい様を許してあげて」頭を押さえつつ、霧島の姿をした東郷が老人をかばった。すると母屋のほうから和服姿の上品な女性が歩いてきた。

「あらあら、忠臣さん。今日は遅かったのね。ところでその女性はどなた？」

「ああ、彼女です。結婚を前提としてお付き合いをしています」

東郷に扮する霧島がしれっとした口調でそう告げると、目の前の女性の顔色がさっと変わった。

「た……たっくんに彼女……」

やがて女性はぶるぶると震え出した。

「お赤飯よお！！！！ お赤飯を炊きなさい」

絶叫する女性の横で東郷が真っ赤になる。

「やめろおふくろ！　っていうか、息子に彼女ができたくらいでなんでそこまで」

「たっくんはねえ、うちのたっくんは、本当にもう女の子恐怖症で、このままでは東郷家存続の危機だって、母さんも家の者も身を削る思い出心配していたのですよ。ええ、東郷家は二人の結婚を承諾いたしますとも。なんなら今夜にでも祝言を上げますか？　母さんそれでもいいわよ。っていうか早く子供作りなさい」

「待て、おふくろ。それは展開早すぎだろ」

東郷があわてて間に割って入った。

「まあ、おふくろだなんて嬉しいわ、お譲さん。でもね、あなた東郷家の嫁になるのだったら、ここはあえてお母様と呼んで頂きたい

の」

ついつい自分の身体のことを忘れて、口走ってしまった後で東郷はマズイと口を噤んだ。

「祝言は早いけど、お互いに結婚を考えているのなら、うちに住み込んで行儀見習いをなさい」

モウ……絶対ニ……逃ガサナイ。

そんな気迫がこもった様子で東郷母が、霧島に扮する東郷を見つめている。

「じゃあ、さっそく親御さんに連絡をとりますから」

そう言って東郷母は携帯を取り出し、執事を呼びだしたのだった。

キス キス すきっす

「私についていらっしやい、お嬢さん」

東郷母の後に霧島に扮する東郷がついて行った。

純和風の巨大な屋敷に、仄かに漂う檜の香りが鼻腔を掠める。

渡り廊下に掲げられた釣り灯籠の火に照らされて、庭の中央に植えられた巨大な松の木が揺らめき、東郷母の着物の衣擦れの音も小気味良く、母屋から続く渡り廊下を渡りきると、こじんまりとした洋館が見えた。

「つうか……ここって……」

東郷は自分の顔が引きつるのをこらえられなかった。

そこは東郷家の当主が嫁を貰った日から、一年間過ごすとされている寢所。

「忠臣も綾香さんも、今日からここで暮らすのですよ」

東郷母はしれっとそう告げた。

「あまりにも……これはあからさまじゃね？」

「あつ、俺全然いいツスよ？ センパイ」

そう言って霧島が背後から、東郷を抱きつく。

「お……おとおお前なあ」

東郷はおのずと声が上ずり、赤面してしまう。

母屋からは完全に独立した古い洋館。

東郷はがっくりと肩を落とした。

「さっ、行きましょう。センパイ」

霧島が東郷の腕を引っ張って洋館の門扉の前に立つ。

東郷母が鍵を開け、霧島にそれを渡した。

「すぐに使用人に用意をさせますから」

そういうと東郷母は母屋に引き返していった。

「どうするよ？ 霧島」

そう言って東郷が振り返ると、霧島はえらく上機嫌だった。

「なに？」

「なについて、その……なんか新婚さん：つうかこんな展開」
東郷は赤面して、もごもごと口ごもった。

「なにか不都合でも？」

霧島がにっこりと微笑む。

「むしろ好都合じゃないですか。勉強も教えて貰えるし」
「まあ、それはそうなんだけど」

エントランスの続きにある階段を上ると、主寝室だ。

豪華な扉を開くと部屋の中央にベッドが据えられている。

「はあ、出たよ。ダブルベッドだよ」

そういつて肩を落とした東郷を霧島が背後から抱きしめる。

「センパイは嫌……ですか？」

東郷の心臓が跳ねる。

「お：お前：お前はいいのかよっ、こないきなり……」

「そんな泣きそうな顔しないでください。冗談ですよ。俺はセンパイに嫌われることが死ぬほど恐いんですから」

耳に低く落ちる声に、東郷は甘い眩暈を覚えた。

いつの間にか霧島の一人称が変わっている。

霧島はひらひらと手を振って部屋を出た。

「あっ待って、霧島」

そういつて東郷は廊下に出た霧島を追う。

「センパイ、勉強教えてもらっていいですか？」

そう言つて霧島が、東郷を振り返る。

「とりあえずセンパイの第一志望に受からなきゃですもんね。後のことは試験が終わってから考えます」



「そう、だからそこでオイラーの定義を用いて……なーんだ、お前頭いいじゃん」

そういつて東郷が霧島を見上げると、霧島は薄らと頬を染めている。

「じゃあ…ご褒美をください」

そういつて霧島は真顔で東郷を見つめる。

霧島扮する東郷の端正な顔が近付いてくる。

（やばいつ、キスされる）

東郷は反射的に霧島から身体を離れた。

「わかった、じゃあ、お茶淹れてやるよ」

そういつて東郷が立ちあがると、控え目なノックが聞こえてきた。

「あつ、何？」

そういつてドアを開けると、和装の年若い女の使用人が食事の用意が整った旨を告げた。

「まっ、そういうわけだから……メシ……」

ぎこちなく東郷が霧島を振り返ると、霧島はむくれていた。

「キスくらい、いいじゃないですかあ、センパイ……俺のこと好きって言ったくせに」

「ばかっ……キスって……」

そう口ごもって、東郷は赤面する。

「考えて、おく」

ちらりと霧島を見やって、小さく呟いた。



テーブルの中央に、蝋燭の灯が揺れている。

糊の効いた、まっ白なテーブルクロスの上に、シャンパンの注がれ

たグラスが置かれると、霧島はそれを口に運ぶ。

赤い舌がチラリと覗き、唇を舐める仕草が妙に艶めかしくて、向かいあう東郷は、霧島から目が離せない。

そんな東郷の内心を見透かしたように、霧島が優越の微笑を浮かべる。

「なに？」

霧島の低い美声に、東郷はどぎまぎとしてしまう。

「な……なななななにもっ」

不自然に上ずった声をあげ、東郷は運ばれてきたサラダを口に放り込む。

「気になる？」

そう言っ、霧島が意味ありげに東郷を見つめる。

「別につ、俺は……でもお前があんなこと言うから……」

東郷は口ごもる。

「キス、したいんでしょ？」

霧島に真顔でそう問われて、顔を覗きこまれると、東郷は真っ赤になって下を向いた。

「霧島の……意地悪っ」

「意地悪をしているつもりはありません。食事が終わって部屋に戻ったら、存分にあげますよ」

そう言っ、可愛く微笑んだ霧島の背後に、東郷は悪魔のしっぽが見えた気がした。

◇ ◇ ◇

食後のコーヒーも等閑に、二人は寝室に戻ると、霧島はベッドの上で足を伸ばして座り、

その上に東郷を座らせた。

「霧島……なんかこの格好えっちいよ」

霧島の胸に手を置いて、うつむき加減に東郷が泣きそうな声色で呟く。

「ん？ 今からえっちいことするんですから、これでいいんですよ」
霧島がにっこりと笑って答えた。

センプイの好奇心

「や……やだ。なんかやっぱりこの体制エロいよ。霧島」

そう言って霧島の膝の上に座らされた格好の東郷が、赤面ししどろもどろになる。

「キス、してみる？ 気になっているんでしょう？」

そう言って霧島が東郷の顔を覗きこむと、東郷は口ごもる。

「そ……それは……そのっ……」

下を向いた東郷の顔を両手で包んで、霧島が覗きこむ。

「してみれば？ ほら」

そう言って霧島は目を閉じた。

「う……ううう……。ほんとに、本当にしちゃうんだからなっ！」

そう言ってぎこちなく東郷は霧島の肩に手を置いた。

東郷の伏せた睫毛が微かに震えて、漸くの事で掠めるだけの不器用なキスが降りてくる。

東郷は俯いて、緊張のために眦に微かに涙を溜めて震えている。

「欲情しちゃいました。センプイ責任とってください」

眼下で霧島がにっこりと微笑むと、東郷は手首を掴まれ引き寄せられてしまう。

その胸に抱き竦められ、じたばたともがくと霧島の唇が降りてきた。少し、かさついた薄い唇が、思ったよりもやわらかくて驚いた。

（身体は入れ替わっても、霧島と自分がキスをしている）

それは確かに感慨深いものなのだけれど……。しかし……しかしだ。思い描いたものと立場が全く逆で、東郷は霧島のキスに腰が砕けそうになった。

軽く触れ合うキスから、徐々にそれは激しさを増していき、侵入してきた霧島の舌が濃厚に絡め合わされる頃あいには、東郷が音を上げた。

「や……ちよつと……ま……て、お前、エロすぎ」

やっこのことで霧島のキスから逃れ、身体を離した東郷は赤面し、眦に涙を溜めて霧島に抗議した。

「センパイ……可愛すぎ」

そういつて霧島は噴き出した。ひとしきり笑い終え、溜息を吐くと東郷に向き直った。

「なんか欲情する男の気持ちってのが、ものすごくわかりました。いいですか？ センパイ絶対に他の男の前でそんな顔見せちゃ駄目ですよ。速効で犯されちゃうんですからね。ちなみにその身体、一応まだバージンですし」

その瞳に灯る、情欲の炎が東郷にはわからない。

「お……おう。なんだかよくわかんねーけど、この身体はお前のもなんだし、絶対に守って見せるぜ」

と東郷は真顔で頷いた。

霧島はそんな東郷の様子に苦笑し、東郷に軽く触れるだけのキスをした。

「まあ焦らずに、おいおいお互いに身体の方も馴らしていきましょう」

身体を離し、霧島はベッドから降りて背伸びをした。

「さてと……じゃあ俺はさっきセンパイに教えて貰ったところを復習してきますんで、センパイは先に寝てください」

そう言っ部屋を出ようとする霧島を東郷が追いかける。

「あつ、待って。俺も行くよ」

霧島を追って、東郷も書斎に向かったのだが、ものの30分もしないうちに霧島の隣でうつらうつらと船を漕ぐ始末。

本格的に東郷が寝入ったのを見計らって、霧島は参考書を置いた。東郷を抱き上げ、愛おし気に寝室に運び、壊れ物のようにそつとベッドに横たえた。

閉じた双眸が普段よりも幼く見える。

その頬にそつと触れて、霧島は満足げに微笑んだ。

「絶対に受かってみせますから。少しだけ待っていてくださいね」

霧島は東郷の耳元にそう囁いて、部屋を出た。



「あつ、しまった。寝ちまったし」

ベッドの上で意識を覚醒させた東郷が、がばっと飛び起きる。サイドテーブルに置かれてあったデジタル時計が、午前6時を示していた。

「あつ、おはようございます。センパイ昨日お風呂はいらないで寝ちゃったでしょう？ お風呂沸かしましたから、はいって」

そう言って霧島はにっこりと微笑んだ。

「お前は？ ちゃんと寝たのか？」

東郷が心配そうに霧島の顔を覗きこむ。

「まあ、一応は」

そう言って、霧島は曖昧に笑って見せた。

「じゃあ、俺、弁当作るわ」

そう言って部屋を出ようとする東郷の手を霧島が掴む。

「お弁当より……とりあえず、お風呂……ね」

そのまま霧島が背後から東郷を抱きしめる。

「女の子なんだから、きれいにしなくちゃ」

東郷は霧島に耳元で囁かれ、つつい赤面してしまう。

しかし東郷はどうしてもこのスチエーションに慣れない。

やっぱり今もまだ、胸が高まり赤面してしまう。

「き…霧島顔近いって」

耐えかねて、東郷が抗議の声をあげる。

「いけませんか？」

霧島がにっこりと微笑む。

「いけないっていうか……そのっ、まだ慣れなくて……どきどきしちゃうっていうか……まあそのことはいいとして、登校前に風呂に入るよ。やっぱり女の子だもんな。お前も俺にきれいにしていほしいよな」

「まあ…ね」

そう言っって霧島は、東郷の衣服を脱がせはじめた。

「やっ……ちよっと、お前なにして」

「服脱がないと、お風呂入れないでしょう？」

そう言っって霧島が、東郷が着ていたTシャツを脱がせると、霧島の下着が露わになる。

「やあっ…自分でできるよ、霧島。なんか恥ずかしいって」

「どうして？ もとは私の身体なんですから、私は見慣れてます。恥ずかしがることなんてありませんよ」

「っっていうか、お前なんか脱がし方もエッチいし……」

東郷が赤面し、うろたえる。

「気のせいですよ、センパイ。センパイこそ欲求不満なんじゃないですか？」

「そっ、そんなことないっ！」

「じゃあ、いじってみましょうか？」

東郷を壁際に追い詰め、霧島が微笑む。

東郷の決意

「なーんていうのは冗談ですから、さ、はやく入って」

そう言っ、防水靴を履いた霧島が浴室から東郷を手招きした。

「とかいいつつ、なんでお前まで入ってくるんだよ、霧島」

「洗ってあげますよ、ほらこっち」

「いや、いいって、自分でやるよ。それくらい」

頑として抵抗を試みる東郷であるが、最後の砦のバスタオルが霧島の手によって剥ぎ取られてしまう。

「や：やだっ、霧島」

東郷が泣きそうな顔をする。

「だからもう！ お風呂に入るにしても女の子は色々大変なんですよ。だからちゃんということ聞いてください。センパイ」

霧島がそう言っ、着ているトレーナーの腕をまくった。

「女の子はね、いつもきれいにしていなくちゃいけないんです」

優しい温かさでシャワーが東郷の頭に降り注ぐ。

「じっとして」

髪を手際よく洗い上げていく霧島の手が気持ちよくて、東郷は目を閉じてしばしされるがままになっていた。

「シャンプーの後は、トリートメントをしみ込ませて、その後はコンデショナーです」

「うっ……女の子って本当に大変なんだ」

「そうですよ、この髪の長さとキューティクルを保つのは至難の業なんです」

そう言いながら、霧島はコンデショナーを洗い流し、タオルで髪をアップにした。

「あっ、ちなみに身体についたトリートメントやコンデショナーをきちんと洗いがさないと、後でニキビや肌荒れの原因になってしまふんです。気をつけてくださいね」

(疲れた)

東郷は小さく溜息を吐いた。ドライヤーで霧島に髪を乾かして貰っているのだが、ドレッサーの鏡に写ったその顔には、すでに疲労の色が濃く滲み出ている。

「そんな顔しないでください。センパイもきれいな女の子は好きでしょう?」

「いや、まあそれはそうなんだけど、ひょっとしてこれを毎朝やるの?」

東郷はげんなりとその場に突っ伏した。

そんな東郷を霧島が不思議そうに見ている。

「楽しくないですか?」

「へ? 楽しい?」

東郷が素っ頓狂な声を出す。

「そうですよ。女の子だったら誰でもきれいになりたいって思いますよ。だから必死で努力するんです。そしていつもより少しだけきれいになった自分を、好きな人が見つめてくれたら……きつとすごく幸せだろうなってずっと思っていました」

そういつて鏡越しに霧島が笑っている。

(ヤバイっ、今のキュンときた)

東郷はくらくらとした眩暈を覚えながら赤面する。

「なに? どうしたんです? 顔赤いですよセンパイ」

そういつてからかうように言った霧島の顔を、東郷が両手でやんわりと包みこむ。

「あのさ、俺お前のことちゃんと好きだからな」

その言葉に、霧島が静止する。

「あ……あああのっ、霧島?」

その沈黙に東郷が一瞬焦りを覚えたのだが、やがて霧島にきつく抱きすくめられる。

霧島は泣いていた。

無言のまままで小さく肩を震わせて。

「霧島……？」

東郷の瞳が見開かれる。

「お前なんで泣いてんの？」

東郷が慌てて後ろを振り返り、霧島の顔を上げさせる。

霧島は泣き顔を見られまいと、顔を背けようとした。

「なんでだよっ、好きだっていつてんのに何で泣くんだよ！」

胸に一抹の不安が過り、東郷は声を荒げた。

「嬉し……く……て」

嗚咽混じりに霧島がようやく応えた。

「その言葉欲しさに、あたし死にそうになってましたから……」

霧島は泣きながら笑った。

その笑顔に、東郷はきつく唇を噛んだ。

（俺はこいつにこんな顔をさせて、一体何やってたんだろう）

自責の念に胸を掻き毟りたい衝動に駆られる。

（恋とは誰しも命がけなのだ。その過程で負った傷が原因で、死ん

でしまう奴だっている。

傷つくのが恐くない奴なんていやしない。

だけど霧島は逃げなかった。

何度拒否されても、そのひたむきな瞳を俺から逸らす事は一度もなかった。

俺が霧島を拒否した分だけ、その心にはきっと無数の傷がついていくはずだった）

「霧島ごめん」

東郷は霧島に頭を下げた。

「俺はお前を癒す事ができるのだろうか？　今からでもそれを償うことができるのだろうか？」

東郷が霧島を真っすぐに見据えた。

「俺はもう逃げないよ。何度でも言う。俺、お前が好きだからなっ！　寝癖ついてても、たとえ風呂に入ってなくなたって、俺、ちゃんとお前のこと好きだからなっ！」

東郷が顔を真っ赤にして半ば怒鳴っている。

不器用ではあるが、その言葉は確かに霧島の心を打った。

「ありがとうございます。もういつ死んでも悔いはありません」
そう言って霧島はにっこりと笑った。

「ああもう！　ったく……縁起でもねえことってんじゃねーよ。これからだろ？　受験終わったらデートするんだろ？　だったらプラン練つとけ。どこでもお前の好きなところに連れてってやるから」
そう言って東郷が霧島を見やる。

「いっ痛う」

刹那、ちくりと下腹が痛んだような気がして東郷が顔を顰める。

「なに？　どうしました？　センパイ」

霧島がそんな東郷を怪訝そうに見つめた。

「別に、どうもしねえよ。それより飯食いにいこうぜ」

東郷は曖昧に笑って霧島とダイニングへと向かった。



『2－C』の教室の前まで霧島が東郷を送った。

「窓際の後ろから二番目の席があたしの席です」

「おう、わかった」

霧島がそういつて指差した席の前には、剣道部の現主将である仙台

がいた。

「あっ、ラッキー前の席、仙台君だし」

そんな東郷の視線に気がついたのか、仙台もこちらを一瞥した。

東郷が仙台に会釈すると、仙台はなぜだか真っ赤になって視線を外した。

「なんでい、仙台君の奴……変なの」

東郷はそんな仙台の態度に、少し拗ねたように口を尖らせた。

一方霧島は、そんな仙台に対して剣呑な視線をくれる。

「あのムツリ、さては惚れたな。絶対許さねえ……センパイ、くれぐれも気をつけてくださいね。なんせセンパイは今あたしの身体で、しかも超絶乙女なセンパイの精神が入っているんですからね。女としての色気むんむんなんですからねっ！ スーパーサイヤ人だってめじゃないくらいに最強なんですからねっ！ そこんとこちゃんと自覚してくださいよ。じゃないと大変なことになるんですからね」

霧島が東郷の両手を握りしめ、泣き出さんばかりの勢いで必死に訴えている。

「な……なんかよくわからんけど、とりあえずわかったよ」

東郷は霧島の迫力に押されて渋々頷いた。

仙台くん

席に戻った東郷は、一時間目の授業の英語の教科書を取り出した。
(っていうか、授業って今どのへんだろう?)

昨年自分たちも使った同じ教科書なのだが、東郷のそれとは違い霧島の教科書はまっ白だった。

(あいつ、本当に勉強してねえな。帰ったら説教だ)

東郷は密かに決心する。

「ねえ、仙台君」

東郷は指で前の席の仙台的背中をつついた。

仙台は一瞬、びくっと震えて迷惑そうな顔つきで東郷を振り返った。
「なに?」

それは東郷には今まで決して見せたことのない、冷たい表情だった。
「あっと……今日どこからかって思ってた」

東郷はそんな棘々とした仙台的表情に、なんとなく気押されてしま
う。

「75ページ。シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』的一幕
から」

「ありがとう、仙台君」

仙台に教えて貰ったページを開き、東郷はにっこりと笑って仙台に
礼を言った。

「別にっ、礼なんて」

仙台はそう言って、やっぱりまた赤面している。

「ねえ、仙台君なんか怒ってるの?」

これで会話は終了とばかりに前を向いた仙台的背中を、東郷は尚も
つつく。

「別に怒ってなんかないけど! っていうか君何?」

仙台は苛々とした様子で、後ろを振り返った。

「嘘、絶対怒ってる。じゃなきゃ仙台君、お……じゃなかった私の

ことキライなんだ…」

東郷は机に肘をついて少し拗ねたように、仙台を見上げた。眦に涙が滲んで、きらきらと光って見える。

「き……キライとか、好きとかじゃなくって、君こそ変だよ？ 霧島さん」

「変じゃないもん。仙台君の意地悪！」

東郷の鋭い叫び声に、教室がしんと静まり返った。なぜだか東郷は両目から盛大に涙を流していた。

（あれ？ なんか俺変だ）

このときになって、ようやく東郷は自身の精神状態の異変に気がついた。

感情のコントロールがきかないのだ。

慕ってくれていた後輩から冷遇されることは、確かに悲しいことではあったが、別に高校三年生にもなって大泣きするほどのことではない。

普段ならさらっと流したことなのに、なぜだか今はそのことが『クリリンをフリーザに殺された悟空』レベルで悲しいのだ。

クラス的女子たちからの同情の視線が、東郷に集まる。

「霧島さん、大丈夫？ もう泣かないで」

そう言って自然に女子が東郷のまわりに集まってきて、ハンカチで涙を拭ったり、背中をさすったりして慰めた。

（女の子を泣かせるなんて、最低！）

そんな冷やかな視線が、痛いほどに仙台を刺した。

「ま……さて、俺は何もしちゃあいない。今日の英語の授業がどこからだと聞かれて、それに答えたただけだ」

（なんでそれで泣くんだよ！ おかしいだろ。っていうか絶対俺の所為じゃねえし）

いたくプライドの傷ついた仙台であった。



（なんであいつ、泣いたんだろう……）

仙台は机の上で頬杖をつき、短く溜息を吐いた。

生まれて初めて女の子を泣かせた所為だろうか、自分は今ひどく動揺していると仙台は思った。

泣いたのが霧島綾香でなく他の女だったら、自分はここまで取り乱しはしなかったのではないか、とも仙台は思う。

仙台は霧島綾香のことがずっと嫌いだった。

ルックスは文句なしの美少女だと思うのだが、だけど、自分は確かに霧島綾香が大嫌いだった。

霧島はいつもどこか虚ろで、捉えどころがなく、ふざけている。何事に対しても真剣さがなく、その癖一応は人並み以上になんでも器用にこなしてしまう。

そんな霧島綾香が目障りで、しかし一方では羨ましくもあった。嫌いであるはずなのに、なぜだか視線はいつも霧島を追っていた。身体全体がアンテナになったみたいに、その気配を感じようとしていた。

そうしていないと、いつかそこから霧島がいなくなってしまうのではないかというそんな不安さえ込み上げてくる。

目障りだと思ふ反面、霧島が自分の前から消えてしまうことは我慢ができなかった。

霧島という存在は自分でさえも持て余す、複雑な気持ちにさせる。

（だけどあいつは、泣く前に笑ったんだ）

霧島綾香が、今日自分に笑いかけた。それは仙台にとってまさに青天の霹靂だった。

しかも二度も……だ。

霧島の笑顔は屈託のない無垢な笑顔だった。

その笑顔を見て、なぜだか仙台はどきまぎとして、身体が火照って、彼女に対してどう反応していいのかわからなかった。
そう……わからないのだ。

「じゃあ、ここの英文を……そうだな、霧島訳してみろ」
英語教師の杉浦が、霧島扮する東郷を名指した。

「はい」
東郷扮する霧島は、少し高めの透き通った美しい声で、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の一幕の和訳を読み上げた。

「恋とはいわば深い溜息とともに立ち昇る煙、きよめられては恋人のひとみに閃く火ともなれば乱されては、恋人の涙に溢れる大海ともなる。それだけのもので大変分別くさい狂気の息もとまる苦渋かと思えば、生命を養う甘露でもある」

その言葉を、仙台は心の中で反芻した。

それは今の自分の心境に、悲しいほどに同調する。

（まさか、この俺が恋など！）

そう考えて、仙台はその思考を否定する。

（ありえん。しかも霧島だぞ？ あの大っ嫌いな霧島綾香だぞ？）
思考のなかで、仙台のツンとデレな部分が激しく闘ぎあっているのだった。

東郷生理になる

昼休み、東郷は購買で買った菓子パンを前に溜息を吐いた。
食欲がない。

身体も気だるくて、頭と腹もしくしくと痛む。

「霧島さんも一緒に食べようよ」

と気さくなクラスの女子の招きに応じて立ち上がったまでは良かったが、刹那強烈な吐き気と耳鳴りに苛まれ、意識が途切れた。

「霧島さん！ 霧島さんしっかりして」

騒然となったクラスの女子たちがその周りを取り囲んでいる。

「どけっ！」

そういつて人垣をかきわけて入って来たのは仙台だった。

「ちょっと」

乱暴に肩を掴まれた女子が、仙台を軽く睨むが、そこにいつもの温厚な人当たりの良さは、微塵もなく、かえってその迫力に気押される。

仙台は教室の床に蒼白な顔色で横たわる霧島を、躊躇いもせず抱き上げた。

霧島の長い髪がはらりと散って、仙台の腕の中で頼りなく華奢な肢体が投げ出される。

「ちつくしゅう！ 霧島しっかりしやがれっ」

不安と焦りに、仙台は唇を噛みしめた。

廊下ですれ違う生徒たちの好奇な視線も、今は目に入らない。
階下の保健室の引き戸を、仙台はもどかし気に蹴った。

「先生、開けてくれ！ 急患なんだ」

「もう、ここは保健室なんだからもつと静かに入ってきて頂戴！」
苛立たし気に引き戸が開いて、保健医が顔を出した。

四十前の恰幅のいいおばちゃんである。

「おりよ？」

保健医は仙台の顔と、その胸で意識を失っている霧島を見比べて意外そうに目を瞬かせた。

「とりあえず、このベッドに寝かせて」

仙台は指示された通りに、霧島をベッドに寝かせた。

「先生、あのっ……大丈夫なんでしょうか？」

仙台の顔が心配そうに曇る。

「だーいじょうぶよ。生理で死にゃあしないっての」
そう言って保健医は豪快に笑った。

（はっ？ 生理……って……）

仙台の思考回路が停止する。

「とりあえず着替えさせるから、出ててくれるかな？」

保健医の言葉に仙台がみるみると赤面する。

「う、うわー！ー！ー！ー！」

仙台は弾かれたように後ろに飛びのき、保健室の引き戸を閉めた。

そんな仙台の様子に保健医がニタリと笑った。

「ほう、今時天然記念ものだな。そのリアクション……校内一のモテ男は童貞か」



天井の白けた蛍光灯が、ぼんやりと霞んでやがてはつきりと視界がクリアになる。

吐き気を伴った頭痛のせいで、気分は最悪だ。

「う……ん……」

カーテン越しにその気配を感じたのか、保健医が様子を見に入ってきた。

「気がついた？ 霧島さん」

「あつと……はい」

東郷は気だる気にベッドの上に身を起こした。

確か倒れる前は制服を着ていたはずのだが、今はジャージを着用している。

保健医は冷蔵庫からスポーツドリンクを取り出し、東郷に渡した。

「それと薬飲んで、もう少し寝てなさい」

そういつて、ベッドの脇にあるパイプ椅子に腰かけた。

「教室で意識失っちゃったの覚えてる？」

そう問われて、東郷は未だぼんやりと霞みがかかったような記憶を必死で手繰りよせてみる。

（そうか、昼休みにもものすごく気分が悪くなって、それで倒れちゃったんだ。っていうか俺なんか病気？ 余命三カ月とかそういう展開？）

心にそんな不安が過り、目頭が熱くなる。

「せ…先生、俺、どうしちゃったんでしょうか？ もしや不治の病とかなんでしょうか？」

東郷は保健医の両手をぎゅっと握りしめ、必死の形相で見つめた。

「おいおい、生理ごときで死ぬかっての。オーバーだったの」

保健医はそんな東郷のマジ顔に軽く引いていた。

（生理……生理……生理……）

東郷の頭の中に聞きなれない言葉が空しくこだましていた。

生理とは、とどのつまりはアレなわけだ。

中学に上がった頃の思春期に、なぜか愛用の辞書のその単語の箇所
に、色ペンでマーキングをしてしまう、アレ。

早熟な女子がなってしまうとやたらとからかわれてしまう、アレ。

保健体育の授業で、体育教師がマジ顔で話するのが超恥ずかしかった、アレ。

（そういえば、昨日あいつそんなこといつていたっけ？）

東郷の脳裏に霧島の言葉が過った。

（しかし……この俺が生理だど？？？）

東郷の脳裏に今までの人生が走馬灯のように駆け巡った。

今は亡き祖母が、端午の節句に『りっぱな男の子に成長するように』と鯉幟と東郷家の家紋が入った甲冑をプレゼントしてくれたこと、5歳の時に鎧の重さに耐えきれずよろよろとしていたところを、「この軟弱者め！」と危うく祖父に切られそうになったこと、漢になるために舐めつくした辛苦の日々の果てに己があるというのに……。

（この俺が……この俺が……生理だど？）

しかし東郷は思う。

女人は偉大なり。

これほどの苦行に日々耐えているのだ。

その辛さに比べれば自分が今まで耐えてきたと思っていた辛苦など取るに足りないものであるかのような気にすらなる。

さらに己の胎を開き子どもを出産するときには、その約100倍（推定…作者の友人談）くらいとんでもなく痛いのだそうだ。

（か弱き身体で、よくもそんな痛みに耐えていたものだ）

東郷の脳裏に身体が入れ替わる前の霧島の姿が浮かんだ。

その時、保健室の扉をノックする音が聞こえ、霧島が入ってきた。

霧島の嫉妬

「センパイ！ 倒れたって本当ですか？」

血相を変えて霧島が保健室に飛び込んてきた。

「いや、そんな大したことはないらしくって……そのっ……なんつうか……生理になっちまったらしくって……」

東郷は真っ赤になって口ごもった。

「まあ、そうじゃないかなとは思ったんですけど、慣れるまでは大変だと思います」

霧島は東郷の言葉に、ほっと息を吐いた。

その瞳が慈しみに揺れる。

「まだ痛みますか？」

霧島はそう問うて、東郷の髪を優しく撫でた。

「ううん。そうひどくはない」

その心地よさに東郷はしばし目を閉じた。

「まだ顔色が悪いです。無理せず今日はもう早退しては？」

霧島が心配気に東郷を覗きこんだ。

刹那、席を外していた保健医がかえって来たらしく、引き戸を開ける音がした。

「調子、どう？」

そういつて保健医がカーテンから顔を出した。

「あれ？ 東郷くん……こりゃ意外」

保健医がきょとんとした顔をする。

「まあいいや。ところで霧島さん、今日はもう無理せずに早退したらどう？ 6時間目どうせ2-Cは体育だしさ」

そういつて保健医は霧島の枕元に歩み寄った。

「生理痛っていつても、辛い時は無理しない方がいいわ。帰ってゆっくり休みなさい」

東郷自身も体調が限界であることを悟り、保健医の言葉に従うこと

にした。

「家に連絡いれよっか？」

という保健医を遮り、霧島が立ちあがった。

「あっ大丈夫です。俺が送りますので」

「え？　こら、あんたは授業あるでしょ？　受験生」

「ほんと、大丈夫だからさ。執事の坂下さんに電話して迎えに来てもらうよ」

そう言って東郷は力なく笑った。

「じゃあ、せめて迎えが来るまで、傍にいます」

そういつて霧島は東郷の手を握った。

「まったく、みんな心配してるんだからね。はやく良くなりなよ。

霧島さん」

そう言っつて保健医は口元に微笑を浮かべた。

「あっ、それと仙台君にお礼いいなよ。意識を失ったあなたを血相かえて抱きかかえてここまで運んでくれたんだから」

「仙台君が？」

東郷がきよんとする。

（っっていうかありえないし。俺仙台君に嫌われてるんじゃないのか???）

東郷の頭のなかに疑問符が交差する。

「そうよ。仙台君とても心配してたんだからね」

そういった保健医の横で霧島が小刻みに震えている。

「仙台君に……抱きかかえられて？」

鬼の形相である。

「恐えよ！　お前」

霧島の迫力に軽く引いてしまう東郷であった。

「いや俺、意識失ってたし、これ不可抗力だからっ」

その迫力に気押されて必死で命乞いをしてしまう東郷であった。そんな東郷の様子に、霧島は黙り込んでしまう。

東郷は霧島をちらりと盗み見た。

「やっぱり……怒ってる？」

そんな東郷に霧島は盛大に溜息を吐いた。

「嫉妬してます。でもそんな表情かおされたら、怒るにおこれないじゃないじゃないですか」

霧島はぷくりと頬を膨らませて見せた。

「ごめん」

「別にセンパイが悪いわけじゃありません」

東郷が謝ると、霧島の声が少し優しくなった。

「じゃあ、行きますか」

そういつて霧島は東郷をひよいと抱きかかえてしまった。

「うわっちょっと、おろせ！ お前っ」

その腕の中で東郷がじたばたともがく。

「じっとしてください。でないと犯しますよ？」

そう言つてにつこりと微笑んだ霧島に東郷はごくりと生唾を飲み込んだ。

「先生、お世話になりました。じゃあ連れていきますんで」

そういつて霧島は東郷を抱きかかえたまま、保健医に一礼し保健室を出た。

「おろして、霧島、自分で歩ける！」

東郷は真っ赤になって抗議するが、どうやら聞き入れてもらえないらしい。

「ん？ 却下」

霧島は微笑を浮かべているが、東郷は蛇に睨まれた蛙のごとく身を固くする。

幸い今は授業中のため廊下に生徒がいないことがせめてもの救いである。

エントランスの前にはすでに東郷家の車が横付けされている。

執事の坂下が黒塗りの高級車から降り立って、後部座席のドアを開けた。

「昼休みに体調を崩して保健室に運ばれたそうだ。よろしく頼む」

そういつて霧島は東郷を車に乗せた。

「坊っちゃまの下校をお待ちいたしましょうか？」

坂下が霧島を伺う。

「いや、いい。俺は放課後少し用があるから先に帰ってくれ」

「わかりました。では失礼いたします」

そういつて坂下は車を出そうとするが。

「あのっ」

東郷が車の窓を開けて不安そうな顔で霧島を見た。

「なに？ そんな顔して」

霧島が東郷に笑って見せる。

「はやく、帰ってきて」

不安定な瞳の色。

「なに？ どうしたの」

「俺、お前に傍にいて欲しい」

「光栄です。少しだけ待っていてください。野暮な用事を一つ片付けたらすぐに戻ります」

刹那、霧島の顔が近付き唇を軽く啄む。

「ううう……じゃあ、待ってるからな」

そういつて東郷は赤面し、下を向いた。

「では、坊っちゃま、失礼いたします」

坂下の運転する車が静かに校門を出るのを見送って霧島は低く呟く。

「さあて、こりゃあ放課後は楽しい果たし合いになりそうだ」

その瞳に剣呑な光が宿る。

霧島は人けのない廊下を歩き出す。

靴音が気に触るほど耳についた。

剣道場へと続く地下の階段を霧島は進んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6007q/>

バレンタインデー kiss

2011年4月24日00時03分発行